

# 新潮「介護民俗学」から

六車由実

私は、現在、縁あって、静岡県東部地区のある特別養護老人ホーム内のデイサービスセンターで介護職員として勤務している。前職では大学教員をしていた私にとって、高齢者介護の現場は未知の世界であり、そこに足を踏み入れることは大きな冒険であったが、学生時代から民俗学を勉強し、地域のお年寄りたちに聞き書きを続けてきたことが、何か高齢者介護につながるものがあるのではないかと考えた小さな予感と、これまでお世話になってきたお年寄りに間接的にも恩返しをしたいといった浅はかな思いから、3ヶ月間、ホームヘルパー2級の講習を受講したうえで、現職場で働くようになったのである。

働き始めて3ヶ月以上たつが、入浴介助やトイレ介助、ベッドへの移乗などの体力と技術を要する仕事にまだまだ戸惑うことも多く、先輩職員に助けられ何とかこれま

でいるのである。そして、彼らの記憶を侮るなかれ。子供や青年期についての記憶は鮮明であり、十分に民俗資料として耐えうるものなのである。そういう意味で、介護の現場は、民俗学のフィールドとして新たな可能性をもっていると言えるだろう。また私は、次のような点でも、かなり確信的な形で、高齢者介護において民俗学が重要な役割を果たすようになると考えている。

自分は何の役にも立たない、何のために生きているのか、この世は生き地獄だといった言葉を利用者が口にするものがしばしばある。すなわち、利用者の多くは、体力や記憶力の衰えなどにより、社会や家族からの疎外感を感じ、生きる気力を喪失しているのである。ところが、そうした利用者の子供のころや社会で活躍していたころの話や話を聞くと、表情は一変しいきいきと目を輝かせていく。介護の世界では、このような利用者の話を聞くことで記憶呼び起こしていく方法を回想法と呼び、90年代から本格的に日本でも試みられてきた。精神医学から発展してきた回想法では、その効果として、自分自身の人生の整理をつけることで、生きてきたことを肯定的にとらえることができるようになり、過去の自分と今

でやっていた。また大きな心の支えになっているのは、デイサービスの利用者との関係である。デイサービスには、大正一桁生まれはもちろんのこと、明治生まれの利用者も通っている。しかも子供のころや若いころのことはかなり鮮明に覚えている。

たとえば、大正2年小田原生まれの女性利用者は、関東大震災の時のことを生々しく語ってくれる。実は、私が民俗学の聞き書きを始めた頃にはもうムラでは大正一桁や明治生まれの方にお話を聞くことはほとんどできなかった。せいぜい聞けても大正二桁の方までだったのである。それが、デイサービスではなんと関東大震災を体験した世代から生の声を聞けるのである。また、高度経済成長期に多くの出稼ぎ者を迎えた静岡県の特徴なのか、北海道長万部出身の炭鉱で働いてきた男性、宮崎県都城市出身で東海道新幹線が開通した年に静岡に來た

の生きている自分との連続性を確認することができるとされている。また個人回想法やグループ回想法など、その方法論も詳細に論じられている。

一方で民俗学の側からはこれまで高齢者介護には全くアプローチがなかったが、私は実際に介護の現場で利用者話を聞きながら、この回想法には民俗学的な知識や手法が必要であることを実感している。というのも、聴き手である介護者の側に、利用者の生きてきた頃の暮らしやその時代背景などについての知識と関心がなければ、利用者の発する言葉の意味を受け止めることは難しいのではないかと思うからである。たとえば、栄村出身の利用者が「私は山育ちで炭焼きばかりしてきたから都会のことはわからないの」と言ったとき、栄村は山郷という知識のもとに、炭焼き小屋はど心なだったのかとか山ではどんなものが採れたか、などといった問いかけを聴き手がしているかなければ、「山育ち」だけで話は終わってしまう。利用者の方に寄り添ってより深く記憶を掘り下げるためには、利用者の暮らししてきた地域や時代とはどういふものかを知っているかどうか、あるいはどれだけそこに関心を向けることができるかどうか、回想法においては、聴き手側に

という男性、そして、長野県栄村、すなわち鈴木牧之の描いた秋山郷で炭焼きの両親のもとで育った女性など、全国各地から利用者が集まっている。その利用者たちが様々な経験について語ってくれるのである。まさに、デイサービスは民俗学の宝庫といっているだろう。

デイサービスは少ない職員で多くの利用者の介助をするため、実際には利用者たちと話をできる時間は一日にほんのわずかなが、毎日少しずつでも私の頭とメモ帳に蓄積されていく多種多様な人生の記憶は、大いに民俗研究者としての私の心を満足させてくれる。

だが、おそらくほとんどの民俗学者からは、介護を受けるような高齢者から聞いた話など裏付けがとれないから民俗資料にはならない、ゆえにそれは民俗学ではなく、単なるエッセ民俗学者の自己満足にしかすぎない、という批判をうけるに違いない。だが、従来の民俗学が恣意的に特徴のある村と特徴のある人々を選択して調査を行ってきたという限界を持っていたのに対して、介護の現場では、ムラでは決して会うことのできない世代や、様々な地域で生きてきた人々が偶然にひとつの場に集まってきていて、そうした人々の記憶に触れることが

求められる資質であるはずである。

もう10年以上前に民俗学はたそがれを迎えたと言われている。すなわち、「ムラ」や「民俗的なもの」が失われた現代社会において民俗学が果たす役割は終わったというのである。しかし、人間が生きている限り、その人生と歴史は積み重ねられていく。これから超高齢化社会を迎え、さらに介護を必要とする人々が増えてくるが、高齢者が介護を受けながらも心豊かに、そして生きる意味、気力をもって生きていくためには、介護職に単なる介護技術だけではなく、その人の生きてきた人生や時代についての知識が必要とされるだろう。介護職を若い世代が担うことになる今後は、少なくとも自分の生まれる80年前までは、時代や暮らしの在り方を知っておく必要がある。しかもそれは単なる机上の知識ではなく、生の言葉を聞くことで得ていく知識であるべきだ。

以上の2点において、私は、長年の蓄積のある民俗学が超高齢化を迎える社会において果たす役割は大きいと考える。まだまだこの提言は未熟なものだが、ここで改めて「介護民俗学」とそれを名づけて、私のライフワークとすることを宣言したい。